

織田作之助『動物集』の草稿

斎藤 理生

はじめに―織田作之助の草稿研究の現在

本論では、織田作之助の『動物集』（『大阪文学』一九四二年二月）の草稿を分析する。現存する複数の草稿を比較検討し、本文の形成過程に迫ることを通じて、この掌編集の表現構造を明らかにすることが目的である。

織田作之助には多くの草稿が残っている。その主要なものは大阪府立中之島図書館の織田文庫に所蔵されている。⁽¹⁾ 織田文庫の資料は、主に第Ⅰ期と第Ⅱ期とに分けられる。第Ⅰ期の資料は、一九七七年に、作之助の姉である竹中タツが寄贈した約二三〇〇点の図書・雑誌・書簡・草稿などである。第Ⅱ期の資料は、二〇一七年に、作之助の姪で養女でもある織田禎子が寄贈した約六五〇点の草稿、書簡などである。⁽²⁾

第Ⅰ期の資料の内、草稿は一七〇点。その内容の一部は、浦西和彦編『織田作之助文藝事典』⁽³⁾で、作品ごとに示されている。ただ、第Ⅱ期には三七七点という、二倍以上の草稿が追加された。このような資料の充実を活かして、近年は草稿を用いた個別作品の分析も進みつつある。⁽⁴⁾

織田文庫所蔵の草稿は、二〇二五年から「おおさかeコレクション」(<https://dalibrary.prefosakajp/>)でデジタル画像が公開された。これま

では中之島図書館で見られなかった資料が、オンライン上で閲覧できるようになったのである。その結果、作之助の草稿に関する研究は、ある段階までは飛躍的に進めやすくなった。本論も、この電子公開の恩恵を受けている。

ただし問題も残されている。⁽⁵⁾ もともと織田文庫で所蔵されている草稿は、ジャンルごと、作品ごとに分類されている。しかし、中には十分に整理されていないものもある。たとえば、本論で扱う『動物集』のように、タイトルが何度も変更された上、複数の掌編で構成されていることも手伝って、断片化し、まちまちの箇所に分類されてしまっている作品があるのだ。

幸い、デジタル画像の公開化に伴って改善もされている。具体的には、『動物集』の草稿を確認しようとした場合、かつては「動物集」だけでなく、「十姉妹」「馬地獄」など、作中の各編の草稿にも当たる必要があった。館内で借り受けたCD-ROMから、ファイルを一つずつ開くしかなかったのである。しかし、現在は「おおさかeコレクション」の検索窓に「織田文庫 動物集」と入れれば、たちまち六種類の関連する草稿が手持ちの端末に並ぶ。

もっとも、研究を遂行する上では、この検索だけに頼るわけにはいかない。後に示す「掌編集」のように、内容は『動物集』でも、検索には引っかけられない資料も存在するからだ。⁽⁶⁾ 本論の目的の一つに、こ

のような見落とされがちな草稿を加えた再整理がある。

織田作之助は、ごく短い小説を作る上でも、何度も推敲しながら書いた。^⑦なかでもここに取りあげる『動物集』は、正宗白鳥「年末所感」^⑧において「いろ／＼な鳥獣を題目に撰つて、人間を描いた小品である。目のつけ所が面白い。少し舌足らずの書振りだが、そこに愛嬌があると言つてもいい。そして、これは都会の文学であり、ことに大阪の産物らしいと思はれた」と好意的に読まれたことで、作家生前から評価の高い作品であった。^⑨ただ、これまでに作中の一編が論じられたことはあつたが、掌編集全体に対するまとまった考察はない。^⑩

この『動物集』は、どのように出来上がったのか。残された草稿に基づいて、本文の形成過程を辿ることは、作品の理解はもちろん、織田作之助の創作方法を知る上でも有益なはずである。

一 『動物集』草稿の全体像

『動物集』は、動物の名前を冠した七つの掌編から成る。すなわち「十姉妹」「土佐犬」「鴉金」「馬地獄」「梟」「狸」「猫の蚤」である。

七つの掌編は、それぞれ別の世界を描いている。また、作中における動物の位置づけは、話ごとに異なる。「十姉妹」「馬地獄」のように題名になっている動物が中心的な役割を果たす話もあれば、「土佐犬」のように、最後だけに出てくる話もある。「猫の蚤」のように話題にしか出てこない場合もあるし、「鴉金」「梟」「狸」のように、動物からイメージされる人間の様子が描かれているだけの場合さえある。

この『動物集』には七種類、計六三枚の草稿が残っている。いま仮に、織田文庫で分類された番号の順に、アルファベットを付して並べると、以下のA～Gのようになる。

A Ⅱ「草稿56」（「動物集 01」四枚）は、久楽堂製の、褐色の野線の四百字詰原稿用紙

B Ⅱ「草稿56」（「動物集 02」二枚）は、松屋製の、橙色の野線の四百字詰原稿用紙

C Ⅱ「草稿Ⅱ—11」（「馬地獄」一枚）は、松屋製の、橙色の野線の四百字詰原稿用紙

D Ⅱ「草稿Ⅱ—70」（「十姉妹」二枚）は、松屋製の、橙色の野線の四百字詰原稿用紙

E Ⅱ「草稿Ⅱ—71」（「十姉妹」三枚）は、松屋製の、群青色の野線の二百字詰原稿用紙

F Ⅱ「草稿Ⅱ—72」（「短篇集 十姉妹」一枚）は、久楽堂製の、褐色の野線の四百字詰原稿用紙

G Ⅱ「草稿Ⅱ—81」（「掌編集」三枚）は、松屋製の、群青色の野線の二百字詰原稿用紙

このうち第Ⅰ期の資料であるAとBは早くから知られ、『織田作之助文藝事典』にも記載があり、翻刻もされている（ただし抹消や挿入の箇所は書かれていない）。しかし、第Ⅱ期に追補されたC～Gの草稿の実態は、これまで十分に知られてこなかった。

原稿用紙の種類からは、AとF、BとCとD、EとGという三つに区分できる。では、書かれている内容はどうかだろうか。

Aは「十姉妹」の途中から始まっており（「2」から「5」までのノンブルがある）、最後に「猫の蚤」という題名が書かれている。つまり、発表本文とは話の順番がちがっている。原稿用紙の右側五分の二ほどが破かれているのも特徴である。

Bは、「土佐犬」の序盤と、「猫の蚤」の終盤との、途中の草稿（それぞれ「4」「22」とノンブルがある）一枚ずつである。

Cは「馬地獄」の序盤の草稿である。「9」とノンブルが記されている。

Dは、「1」から「21」までノンブルが記されている。冒頭で、「阿堵物」と書かれた総題が抹消され、「動物集」にされている（「阿堵物」は金銭の意）。内容は、「十姉妹」「土佐犬」「鴉金」「馬地獄」「梟」「狸」「猫の蚤」で構成されている。この内「土佐犬」は「だいもんぢや」、「鴉金」は「評判」、「梟」は「遺縁」、「狸」は「遺産」という字が抹消された上で、前記の題名が書かれている。「猫の蚤」の結末までは残っていないが、二一枚という多くの分量を残している点で、『動物集』の草稿を検討する基盤となる資料である。

このDは、Bと連続性がある。DとBとの「4」は、「土佐犬」のほぼ同じ箇所である。また、Bの「22」は、Cの「21」から文章を連続して読める。原稿用紙も同じである。

また、DはCとも連続性がある。原稿用紙が同じであり、Cの内容は、Dの「9」に対応している。細部を見ると、Cで「喫茶店」を「珈琲店」に書き換えている部分が、Dでは「珈琲店」のみ書かれているので、Dの「9」の前段階がCであろう。

つまり、Bの一枚目とCは、Dの派生形である。Bの二枚目はDに後続する。言い換えれば、Bを足すことで、Dは冒頭から末尾まで揃った草稿となる。ここから、織田文庫の第Ⅱ期に追加された草稿の一つは、第Ⅰ期から知られていた草稿の一つの母体であったと判明した。

Eは最も枚数の多い草稿である。ただし二〇〇字詰の原稿用紙ゆえ、文字数としてはDの方が多い。「1」から「31」までのノンブルが打たれている。「1」では、やはり「阿堵物」と書かれた総題が抹消され、「動物集」と記されている。DとEは近い時期に書かれたこと、作家がタイトルに迷っていたことがうかがえる。

では、DとEでは、どちらが先に書かれたのか。内容を見ると、Eには「十姉妹」「土佐犬（だいもんぢや）が抹消」「鴉金（評判）が抹消」「馬地獄」「梟」の途中までが残っている（「狸」や「猫の蚤」に当たる内容は欠けている）。この内「梟」には題名の修正の痕跡がないため、EはDよりも後に書かれたと見なせる。後述するように、各編の内容を検討したとき、いずれもEの方が発表本文に近い点からも、Dが先に書かれたと推測される。

Fは「1」というノンブルが付いた、「十姉妹」の冒頭の一枚だけのものである。ただし最初に「短篇集」という総題がついている。また、Fの文章は、Aの「2」に連続する。原稿用紙も同じで、右側五分の二ほどが破かれている状態も一致している。したがって、第Ⅱ期で追加された資料の一つであるFは、第Ⅰ期から知られていたAの一部であったと判明した。

Gは「掌篇集」という総題のもと、「吝嗇」「蓄財」「遺伝」の三編から成る。ノンブルは「1」「3」「4」と付いている。この内「吝嗇」は「十姉妹」と、「蓄財」は「猫の蚤」と、「遺伝」は「鴉金」と内容がおおむね一致している（詳細は後述する）。そのためGからは、執筆の初期段階では話の数が少なく、並べ方もちがっていたことがうかがえる。また、「十姉妹」から「猫の蚤」へと連続している点はAと同じであるため、「G↓F+A」という連続性を物語つてもいる。

以上の検討を踏まえて、七種類の草稿を時間的な順序に並べると「G↓F+A↓D+B+C↓E」という四段階になる。その間、総題は「掌篇集」（G）↓「短篇集」（F+A）↓「阿堵物↓動物集」（D+B+C）及び（E）、と変遷した。当初は、短い話を集めたという意味だけのタイトルだったが、金銭という主題が強調された。しかし、最終的には動物という共通性を前面に出すことが選ばれた、という推移が

浮かびあがる。

以上が『動物集』の草稿の、全体像の考察である。次に、個別の作品を分析する。

二 「十姉妹」の草稿

巻頭に置かれた「十姉妹」は、十姉妹の飼育が流行した時期に、興味を示さなかった節約家の男の話である。ところが、あるとき男の懷に十姉妹が舞いこむ。男は慌てて追いかけて、転んで足を骨折し、医者にも通わなかったために不自由になるが、外出の困難を口実に、余計な金を使わずに済むと考え直す。

「十姉妹」には、七編のうち最も多くの草稿が残っている。具体的には、Aに四枚、Dに三枚、Eに五枚、Gに二枚、Fに一枚の草稿がある。一五枚の草稿により、「G↓F+A↓D↓E」という四段階が比較できる点で特筆される。

『大阪文学』に発表された「十姉妹」冒頭の本文は以下である。

人みな十姉妹を飼ふた時に、その男ばかりはこれを飼はず、あの鳥は見るのもいやだと言ひふらして、わざとらしくつた。下駄のちびるのを惜んで、小石の多い道は避けてあるき、始末第一の男だつた。天邪鬼で飼はぬのではなかつた。

これに対して、最も早く書かれたと推測されるGでは、「吝嗇」という題名が記されている。冒頭の段落には、次のように書かれている。

猫も杓子も十姉妹を飼うた。それが癪だと十姉妹など見向きもしなかつた。せめて、飼へといふなら、雀でも飼ふさといつてゐた。

十姉妹の流行時に、一人だけ飼わない男がいる。その基本的な内容

は、発表された本文と変わらない。しかしGの本文からは、「吝嗇」な様子はうかがえない。むしろ世間の流行に、あえて背を向ける態度が押し出されている。

次に、F及びAの「十姉妹」に関わる部分を検討する（以下の草稿の引用において、「―」は抹消、〈〉は挿入、■は判読不能であつた文字を指す）。Fの本文には「猫も杓子も十姉妹を飼うた時に、その男ばかりはこれを飼はず、【十姉妹】〈あの鳥〉は見るのもいや」までが書かれている。一方Aは、「だといひふらして、わざとらしくつた。下駄の齒のちびるのを惜しんで、〈小〉石の多い道を避けてある【き】〈くなど〉、常住始末第一の男【ゆゑ】〈だつた〉。眼に見えぬほどの餌も年中に積つては大部分のこと【だと】〈故〉、【物惜しみから飼はなかつ】けつして天邪鬼から飼はぬのではなかつた。」と続く。文章の流れから、FとAとの連続性は明らかである。

ここで注目されるのが、男の性格が「始末第一」であり「天邪鬼ではな」と、序盤に説明されるようになったことである。男が意識的に流行に批判的な立場を取っているのではなく、単に極度の節約家であつたとされる。また、新たに「下駄の齒のちびるのを惜し」むという内容が挿入された。結末の、歩けないために下駄代が浮くことを喜ぶ、という展開に結び付く要素が、序盤に書きこまれた。このように、F+Aの段階でプロットが出来上がったのである。

次に、Dの冒頭は以下のように書かれている。

猫も杓子も十姉妹を飼うた時に、その男ばかりはこれを飼はず、あの鳥は見るのもいやだと言ひふらして、わざとらしくつた。下駄のちびるのを惜んで、小石の多い道は避けて【通】あるき、【常住】始末第一の男だつた。天邪鬼で飼はぬのではな【い】かつた。

この叙述は発表本文に近い。「猫も杓子も」という作之助が好んだ表

現を「人みな」と書きかえたこと以外は、ほぼ同じである。F + Aと比較したとき、Dでは餌に金がかかることを気にする話が省略されている。吝嗇な面が、やや後景化したのである。

発表本文では、このあと十姉妹が偶然「男」の懷に舞いこみ、欲をかいた彼が負傷する流れになる。その様子は、Aでは次のように書かれていた。

日頃上を見て歩かぬ男だつたが、この時ばかり、足もとに気がつかず、いきなり小石にけつまづいて、足がぐね【つ】へり、倒れた。へばきりと骨の音がしたのをきかず、鼻緒がきれたと、咄嗟の想ひが痛く【来】へ地面を這うた。

Aの最終的に至った本文は、発表本文とはほぼ同じである。ただ途中で、骨が折れる音を聞き逃したという内容が挿入された点に注意される。欲にかまけて身体の異変を見逃す迂闊さによって、金銭にのみ執着する男の性格が鮮明になった。同時に、だからこそ末尾で、身体的な不幸を経済的な幸と捉える彼の一貫した、風変わりな個性が際立つことになる。

Gの段階でも、十姉妹が男の懷に來た様子は描かれていた。しかしGはノンブル「1」と「3」との間が抜けているため、男の身に何が起こったのかはわからない。ただ、末尾を描いた「3」の叙述は以下である。

を踏切ることもあるまいと、喜んだ。齒がちびることもあるまいと、喜んだ。この得、一生に見積つて、どれほどか。十姉妹飼はなかつたのは、むろん、吝嗇からだつた。

齒の摩擦を気にする部分から、おそらく他の草稿と同じく、欲をかいた直後に足を負傷したと推測される。また、Gでは最後に「吝嗇」という性格が明言されているのが特徴である。

一方、Aの末尾は次のように書かれている。

この男はひそかに考へて、もうこれで下駄の鼻緒を踏み切ること、齒【■】へちびることもあるまい、一生見積もつてどれだけの得かと、ちんばを口実に、【■】へ生外出しなかつた。坐業の細工職人故、それで結構こと足り【へるのだつ】た。おまけに、仕事もはかどるのだつた。

この叙述は、発表本文とは同一である。F + Aは、「十姉妹」の草稿中でも特に抹消や挿入の跡が多い。内容を吟味しながら筆を進めていったことがわかる。推敲の結果、初出本文に近い内容にまで辿り着いたのである。

裏を返せば、Gでは最後に、足が不自由になったことを「喜んだ」とくり返されているために、男が強がって、天邪鬼を演じ続けているようにも見える。それがAでは感情は書かれず、もっぱら経済的には得だと考えたこと、実際に仕事にも支障を来さなかったことが記された。そうすることで、吝嗇な性格がより際立つようになったのである。では、F + AからDへの変化は、どのように捉えられるのか。端的に言うと、前者の内容は、後者で細分化されている。

まず、第二段落の、懷に飛びこんできた十姉妹について、捕まえて売れば良い金になると考える場面は、Aでは「一羽一円五十錢」だったのが、Dでは「一羽一円。いや、一円五十錢」とされている。男の錢勘定が細かくなっている。結果、十姉妹に無関心だった男の変心が段階的になり、滑らかになった。このDの改変は、発表本文まで受け継がれる。

また、最終段落は、Aでは「この男はひそかに考へて」だったのが、Dでは「何の因果かと男はなげいたが、また考へなほして」に変化した。やはり、男の変心に段階が設けられている。幸不幸の発想を転換

した姿を描くことで、切り換えの鮮やかさが強調されたのである。

一連の書き換えの過程をみると、Gでは天邪鬼に見えかねない吝嗇な男が描かれていたが、F+Aでは、ひたすら吝嗇な性格として一貫している。対して、Dでは男の心理に変化がある。彼は欲望を募らせたり、嘆いた末に思い直したりと心情を変える。むしろ最終的には吝嗇な発想に落ちつく点に、男の個性が認められるのではある。しかし心情に変化があるために、偏屈な性格より、物事の捉え方の面白さが話の中心になったのである。

EはDの清書版にあたる。ほぼ修正もない。だからこそ、総題が「阿堵物」から「動物集」にされていることが、改めて注目される。Dの段階で一度「動物集」に決めたにもかかわらず、再び迷っていたことになる。ただ最終的には、金銭を意味する総題は退けられ、動物によるつながりが示された。

織田作之助は『大阪文学』の次号（一九四二年一月）に掲載した「創作号作品評」で、「古木雄呂志」なる筆名を使い、『動物集』を自ら批評した。そこでは「織田作之助の味噌は、金や、やりくり生活に関する話ばかりを集めて一つ一つ違つたスタイルで書き、それにそれぞれ動物の題をつけたところにあるのだらう」と述べられている。「金や、やりくり生活」を描いた別々の話を「動物の題」で包摂した着想を、作之助は強調した。それは、人々が多彩な方法で生計を立てる様子を具体的に描くと共に、そうした姿を、動物を介して相対化することで、人間の生活というものを、距離を置いて見直させるねらいがあったからではないか。

三 『動物集』のその他の話の草稿

三・一 「土佐犬」

「土佐犬」は、「わたし」が並外れて大きな人と小さな人に関する知識を披露した後、実際に映画館や街角で見た一人の小さな男の記憶を語る話である。男は職を転々としつつ、直近では大きな土佐犬の散歩をさせられていた。

この作品には、B・D・Eの原稿が残っている。しかし、Bは序盤の「延宝八年には、大阪道頓堀に長正味一尺二寸の一寸法師が見世物に出たと伝へられてゐる」話に触れているだけの文章で、一編を分析する上では、ほぼ参考にならない。また、DからEには変更が少なく、EはDの清書として位置づけられる。したがって、『動物集』の形成を考える上で、「土佐犬」はもっぱらD内部の変更を検討するべきケースになる。

Dの内部で最も注目されるのは、末尾に多くの手が入っていることである。雑誌に発表された本文は以下である。

最近土佐犬をつれて歩いてゐる彼の姿を見うけた。実に逞しい立派な土佐犬だつた。鎖の端に両手でしがみついて、汗づくになつてゐた。大きな額が湯気を立ててゐた。笑ひ顔一つせず、あはれだつた。土佐犬好きの金持に雇はれて、毎日犬の運動に歩いてゐると覺しかつた。物好きな金持もあるものだ。

これに対して、Dの草稿は以下である。

〈最近〉土佐犬を【ひつぱつ】〈連れ〉て歩いてゐる彼の姿を見うけた。【ひつぱられてといつた方が正確だらう。朝、■土佐犬の〈犬の〉運動は】実に逞しい、立派な【犬】土佐犬だつた。【彼を

ひきづりまはしてゐた。】鎖の端【を】へに【両手】に■■■■【でしがみついて、汗づくになつてゐた。大きな額が湯気を立ててゐた。笑ひ顔一つ見せず、【哀】へあはれだつた。土佐犬好きの金持ちに雇はれて、毎日犬の運動に歩いてゐる【のだ】へと覚しかつた。物好きな金持もあるものだ。

多くの抹消跡から、「彼」が土佐犬を連れた場面をいかに表現するかに作家が努めた結果、発表本文とはほぼ同じ内容に至つた様子がわかる。当初は、「彼」が犬に引つ張られ、引きずり回されて……とくわしく説明していた。しかし改稿後は、土佐犬のたくましさと、しがみつく「彼」とを描くだけにして、対比的な効果を上げている。困難な仕事に従事する「彼」の姿は語り手の哀れみを誘う。ただ、そうした心情はすぐに「物好きな金持」への関心に逸れていく。同情よりも、人の金の使い方への興味で閉じられる。そのため感傷的な話にはならないのである。

三・二 「鴉金」

「鴉金」は、借金の返済に苦しむ寿司屋の夫婦の話である。妻はしばしば質屋に通う。ただし世間体が悪いので、質物を出前用の提箱に入れて運ぶ。店名の入った提箱を手で町中をかけずり回つた結果、期せずして評判を呼び、人気になつて借金を返し、質屋への出前を提箱に入れて持つて行けるようになった。

この作品には三種類の草稿が残っている。G・D・Eである。しかし、DとEそして発表本文とは、後述する題名を除いて、ほとんど変更がない。したがって、GからDと、D内部での変更が重要になるケースである。

Gの内「鴉金」に残っているのは、ごく一部である。「寿司屋」と書

かれた題名が、抹消されて「遺伝」にされている。本文は「〈その〉寿司屋【は非常によくはやるといふ評判で】」までしかない。ただ、Gの段階で既に「評判」をめぐる話として構想されていたことはわかる。

それがDになると、題名は「評判」が消されて「鴉金」になっている。Dは本文も、発表本文に近い。ただ、序盤の高利貸を頼る場面において「百円借りて、三十日限りの利息天引で、六十円しかはへいらず、毎日日が暮れると、自転車来て、その日の売り上げをさらへて行つた。〈俗にいふ鴉金だ。〉」と説明されている部分は注意される。「鴉金」という題名に関わる一文が、後から挿入されているのである。半ば強引に「鴉」という動物が強調されたのは、「吝嗇」が「十姉妹」に、「阿堵物」が「動物集」に変更されたのと同じ方針に基づいているのであろう。さまざまな動物を前面に出しながら、実は金銭をめぐる世の人々の諸相を描いている。各編の執筆と、全体をまとめる作業とは、並行して調整されていたようである。

三・三 「馬地獄」

「馬地獄」は、大阪の堂島川にかかる橋に佇む「彼」の話である。日々の仕事に疲れた「彼」は、橋の傾斜に苦しむ荷馬車の馬を見てわずかに心を慰めている。あるとき一人の男に道を尋ねられる。困窮した男に、「彼」は思わず些少の金を与える。ところが三日後「彼」は同じ男に、同じように声をかけられた。寸借詐欺に気づかれた男は逃げ、入れちがいによってきた馬の表情を「彼」は見つめる。

この作品は、C・D・Eの三種類の草稿が残っている。そのためCからD、DからE、Eから発表本文へという比較が可能である。ただ、例によってDからEには大きな変更がなく、Eはほぼ発表本文と同じである。そのためCからDへの変更と、D内部の変更が際立つ。

Cは「馬地獄」の冒頭一枚ぶんで、以下が全文である。

東より順に大江橋、渡辺橋、田簀橋、そして船津橋まで来ると、橋の感じがにはかに【見】へみすばらしい。橋のたもとに、ずり落ちたやうな感じに薄汚い大衆【喫茶】店兼飯屋があり、その地下室はどこかの事務所【だ】へらしいが、久しく人の姿を見うけない。それが妙に【橋の色を】灰色が見える。そんなこともこの橋の陰気

一方、Dの冒頭は以下である。この叙述は、発表本文とほぼ同じである。

東より順に大江橋、渡辺橋、田簀橋、そして船津橋まで来ると、橋の感じがにはかに見すばらしい。橋のたもとに、ずり落ちたやうな感じに薄汚い大衆珈琲店兼飯屋がある。その地下室はもとどこかの事務所らしかったが、久しく人の姿を見うけない。それが妙に陰気くさ【く見える】へいのだ。また、大学病院の建物も橋のたもとの附属建築物だけは、置き忘れられたやうにうら淋しい。《薄汚れてゐる。》入口の階段に患者が灰色にうづくまつたりしてゐる。そんなことが一層この橋の感じをしょんぼりさせてゐるのだらう。川口界隈の《煤》煙に【覆】【覆】【く】へくすんだ空の色が、重くこの橋の上に垂れてゐるやうだ。川の水も濁つてゐる。

明らかに、冒頭の記述が詳細になった。大学病院や空の色、川の水の記述が加わることで、船津橋（単行本版の本文では、堂島川の実際に即して玉江橋）を中心とした、灰色にくすんだ中之島周辺が強調された。一編の色調が濃厚になったのである。

「馬地獄」の構成は、宮川康が指摘するように、起承転結になっている^①。その構成はDの時点で定まっている。また、その「転」に当た

る部分には、下敷きになった本があった^②。しかし、結末は独自のものである。寸借詐欺をした男に再会して逃げられるのは元の本と同じだが、「馬地獄」では直後に馬が登場する。逃げる男と逃げられる男に馬を加えた、三者が描かれている点が「馬地獄」の特色である。独自の表現構造をもたすためであらう、Dの末尾には改変の跡が多い。

それから三日経つ【たあ】へた夕方、れいのやうに欄干に凭れて、汚い川水をながめてゐると、うしろから声をかけられた。もし、もし、ちよつとお伺ひしますがのし、針中野ちゆうたらへこから……、振り向【くと、この間の男】いて、あつ、君はこの間の——男は足音高く逃げて行つた。その方向から荷馬車が来た。馬が【嘶】へいなないた。彼はもうその男のことを忘れ、【馬の】【い】たや【びつくりしたやうな苦痛】の【の】の表情【に氣をとられ】へを馬の顔に見てゐた。

とりわけ、馬の表情を「彼」が受け止める過程を推敲していることがわかる。当初は、馬の驚きと苦痛の表情が描かれ、それに「彼」が「氣をとられ」た、という順に書かれていた。しかし改稿によって、「彼」が馬の表情を見たという短い文に圧縮される。こうして最終的にたどり着いた表現は、Eの本文や発表本文とほぼ同じである。

改稿の結果、この場面では、実際の馬の気持ちはともかく、「彼」が馬に、驚きと苦痛を見出していたことが強調される。それは、だまされた「彼」自身の表情であると共に、詐欺に失敗して逃げた男が浮かべていた表情でもあっただらう。三者が重ね合わさるから、一編の題名は「馬地獄」なのである。

三・四 「梟」

「梟」は、「わたし」が現金不足を解決するために、読書家になったと語る話である。貧しい「わたし」は、会社の本屋からかけ買いで新刊本を入手し、読み終えたら即座に売却することで現金を手にし、生活を持している。その結果「濫読家」になったというのである。

「梟」には、草稿がDとEの二種類しかない。これらと発表本文との比較のみが可能である。しかも、Eは「梟」の途中で切れている。そのため比較できる部分は限定される。ただ、ここまで検討した各編では少なかったDからEへの変化が、「梟」では顕著に見られる点が特徴である。

Dの冒頭は以下である。

相変わらず貧乏して居ります。月給ですか。五円昇りました。ええ、七十円です。この十月から。女房が内職で十円儲けてくれます。下駄の台磨きをやつてゐるのです。変つた内職でせう？ 婦人雑誌で見たんです。いや、読んだのは【わたし】（女房）ぢやなく、わたしです。ええ。どんな本でもよむんです。手あたり次第です。おかげで随分いろんなことをおぼえます。この頃は科学書が沢山ですな。ええ、読んでゐます。これで一かどの通俗科学者ですよ。だからといって、べつにどうのかうのといふわけぢやありませんが。

一方、Eの冒頭は以下である。

相変わらず貧乏してをります。月給ですか。五円あがりました。七十円です。この十月から。女房が内職をしてくれ（てゐ）ます。その方で十円はあります。下駄の台磨きです。婦人雑誌で読んだのです。いや、読んだのは女房ぢやなくて、このわたしです。随分いろんな【もの】（本）【が】を読みますよ。この頃は科【学】

〈学〉書が沢山ですな。おかげで、一かどの〈通俗〉科学【】者になれましたよ。

一見すると、語られている内容は大きく変わっていない。しかし、文章が短くなっている。「ええ、」とか「変つた内職でせう？」「だからといって」以下などの、聞き手に応じた文言が減り、一人称の饒舌が簡潔に、凝縮される傾向にあるのである。

この傾向は、その後の部分にも続く。語り手は、貧乏をしているから本を読めるのだ、という説明を始める。その開始にあたって、Dでは次のように述べている。

恥を言はなければ、わかつてもらへません（へ）いいですとも。説明しませう。あとで、うんと笑つて下さい。構ひませんから。この頃、笑ひが欠乏してゐるさうですな。いや、これもなにかで読みましたよ。

一方、Eでは以下のように述べている。

構ひません。説明し【な】ませう。あとで、うんと笑つて下さい。この頃笑ひが欠乏してゐるさうですな。いや、これもなにかで読みましたよ。

やはり文章が圧縮されている。重要なのは、以降の説明を「恥」と捉えたり、「いいですとも」のように、語るにあたって自ら言い聞かせたりしているような語句が削られたことである。その結果、Dにうかがえた語り手の自虐性が、E及び発表本文からは見えにくくなっている。「わたし」の屈折した性格よりも、彼の発想やふるまいに焦点が向けられているのである。このような変化は、「十姉妹」に似ている。

同様の傾向は、Dの内部にも見て取れる。たとえば、Dには元々「しかし、読まずに積んで置く人よりは、わたしの【】やうな濫読家の方がましでせう」という一文があった。しかし、Eでこの一文は完全

に削除された。物資不足の時代に積ん読する人々への批判がなくなつたことで、自己を正当化する意識が後景に退く。代わりに、風変わりな着想及び行動が前面に出る。

この作品に梟そのものは出てこない。ただ、徹夜で読書する「わたし」の充血した眼が強調される部分は、梟という夜も目を光らせる動物に似通う。また、一般に梟には知恵者、賢者というイメージがある。「わたし」も雑学に長じている。ところが、それは現金確保のために雑多な本を読んでいるからであつた。その齟齬による滑稽さが、一編の印象を支えているのである。

三・五 「狸」

「狸」は、遺産目当ての結婚をした女の話である。女は、大金を持つ身寄りのない老人と結婚したつもりであつた。ところが老人には甥がいて、その遺児を世話する羽目になる。しかも、老人は没後に多額の借金を抱えていたと判明した。女は遺児を連れて他家へ嫁いだ。

この作品には草稿がDしか残っていない。つまり、D内部の検討と、発表本文との比較のみが可能である。ただ、後者に大きな差異はない。Dの内部で注目されるのが、大幅な修正の跡が見られる末尾である。

老人は〈まる〉三年女の若さ【を】食ひ、子供【を】~~■~~【~~■~~】の可愛さ愉んだあげく、ぼくりと死んだ。【遺言状とてなく、女はあわてて財産の隠し場所さがしたが、見当らなかつた。老人】すると、あちこちから借金取が来た。〈死ぬまで尻尾を見せなかつたわけだが〉老人は実は財産とて一文もなく、〈あると見せかけ【~~■~~】て〉借金でくらししてゐたのだつた。それとわかれると、女は泣けもしなかつた。

女は【老人の甥を連れて、】間もなく【~~■~~再婚】【他家へ】よそ

へ嫁いだ。老人の甥【を】連れて……。

まず、女が遺言状も、財産の隠し場所も見つけられなかつたという内容が、一度は書かれたにもかかわらず、抹消されていることに気づく。この変更のため、老人の死の直後から借金取りが押し寄せて、老人の嘘にも気づかされるという展開になった。女の行動が削除されたことで、女が受動的にしかふるまえなかつた印象が強められているのである。

次に、「死ぬまで尻尾を見せなかつた」という語句の挿入が、人を欺く「狸」という題名との重なりを明瞭にしている。「梟」と同様に、動物そのものは出てこないが、動物のイメージと関わらせているのである。

さらに、末尾の二文の修正が注目される。修正の結果、「女はよそへ嫁いだ。老人の甥の子連れて。」という発表本文とほぼ同じ表現になっている。もとより、女の行動そのものは変わっていない。しかし、Dでは「再婚」が抹消されて「よそへ嫁いだ」とされ、初期段階では通常の形で書かれていた甥を連れて行く文が、倒置法にされたことで、女が能動的にふるまった印象が強くなる。また、女の子供への愛着も強調されている¹⁹。結果、老人の「狸」ぶりとは対照的に、金儲けを企んでいた女が、自分はだまされたにもかかわらず、弱い者を保護する人生を主体的に見出した物語が浮上するのである。

三・六 「猫の蚤」

「猫の蚤」は、岡部太市という吝嗇な男が、叔母の形見分けにもらつた狐の襟巻きで一儲けを企む話である。時世で襟巻きは売れない。ただ、太市は反古から、狐の襟巻きで猫の蚤を取る商売を知る。早速試みるものの、誰からも呼ばれない。太市は今と昔のちがいを思い知る。

「猫の蚤」には、B・D・Gという三つの草稿が残っている。ただ、先に述べたように、BはDの末尾に当たると。ゆえにGからD+B、そして発表本文という比較ができる。

特に、現存する最初期段階であるGからの変遷を確認できる点で、「猫の蚤」の特色である。Gには「十姉妹」「鴉金」「猫の蚤」しかない。ただし「鴉金」は題名と一行しかない。そのため、Gからの推移を確認できるのは、「十姉妹」以外では「猫の蚤」だけなのである。

Gでは題名が「蓄財」とされ、次のように書かれている。

〔遺産に〕 狐の毛皮をも【つてゐる】へらつた。へむろん、すぐ売ることになつた。しかし、買手はなかつた。贅沢品である。はたと困つた。考へて、猫の【】蚤をとる商売をはじめた。猫の蚤とりませう、猫の蚤とりませうと、へふれへ歩いた。呼び入れられると、まづ猫を水で洗ふ。そして、へ狐のへ毛皮をその上にのせる。濡れた【蚤へ毛】をいやがつた蚤はすべて狐の毛皮に乗り移つた。これは、西鶴の織留にもある話【で、にもある話】だが、この男の独創は、【そのあと】へほかに、蚤の卵を殺す薬を売りつけたことである。

既に、狐の毛皮で猫の蚤を取る商売を思いつく男の話にはなっている。ただし「蓄財」では、男に固有名は与えられていない。また、貧しくはあるようだが、吝嗇だという話はない。「蚤の卵を殺す」工夫を思いついた「独創」が肯定的に描かれているので、題名も考慮すると、「蓄財」に成功した話が構想されていたと推測される。また、猫の蚤を取る方法が井原西鶴の『西鶴織留』の一編に拠ることが明記されている¹⁴。

一方、Dでは題名が「猫の蚤」になり、「岡部太市。三十六の男。平凡な顔の平凡な性質の男」と始まる。発表本文とほぼ同じである。そ

の後の、太市の吝嗇さや、裕福な叔母の死を期待し、形見分けに狐の襟巻きをもたらしたこと、しかし「今の時節」にそのような贅沢品が売れないこと、反古から猫の蚤を売る方法を真似るが失敗するといった展開も、細かな語句の差異を除けば、発表本文と同じである。

GからD+Bへの改稿によって、西鶴作品を現代に応用して成功する話が、昔の手法が通じないことを強調する話に変わっている。その結果、時世の変化が主題として前景化している。その変化は、「阿堵物」という総題の変更に軌を一にしているだろう。金銭それ自体ではなく、経済活動を通して人の世の姿を描くこと、それも動物を介して、突き放して示すことが、作品のねらいなのである。

おわりに

本論では、複数の草稿の差異から発表本文に至る推移を検証することで、『動物集』の理解を深めることを試みた。経済活動をめぐって展開する各編それぞれの人の姿は、共感を誘うというより、対象化されて提示されている。細部の改稿の跡からも、特異な生計の立て方より、思考や着想の意外性や、人の世の姿に焦点が当てられていることが見えてきた。また、そうした他の作之助作品にも通じる特徴が、細かな本文の微調整に多くを負っていることも確認できた。

さらに、分析の過程で、現存する複数の草稿の関係が明らかになった。くり返せば、電子公開化によって織田文庫の草稿は見やすくなった。利便性の向上による恩恵を受けつつ、その過程で抜け落ちる要素を拾い上げながら分析を進めることが、今後ますます肝要となろう。

注

- (1) 日本近代文学館、関西大学図書館などにも一部は所蔵されている。日本近代文学館所蔵のものは日高昭二「織田作之助」(日本近代文学館編『近代文学草稿・原稿研究事典』八木書店、二〇一五年)、関西大学所蔵のものは増田周子編『織田作之助と大阪』(関西大学大阪市遺産研究センター、二〇一三年)を参照のこと。
- (2) 大阪府立中之島図書館蔵「織田文庫」目録—web版— <https://www.library.pref.osaka.jp/site/osaka/oda-web-index.html> の記載による(二〇二五年一月三〇日確認)。
- (3) 和泉書院、一九九二年
- (4) 拙稿「織田作之助『螢』論」(『語文』二〇二三年六月)、勝倉明以「織田作之助「競馬」に内在する嫉妬と喪—本文の生成過程を中心に」(『日本研究』二〇二五年三月)など。
- (5) 以下に取り上げる問題の他に、デジタル画像では再現できない情報は知ることができない、という問題もある。たとえば、デジタル画像では判読できない文字が、現物を透かし見れば読み切れる可能性はある。
- (6) なお、「掌篇集」という表記は草稿の記載に基づく。「おおさかeコレクション」では「掌編集」と登録されているため、「篇」ではなく「編」と入力する必要がある(二〇二五年一月三〇日確認)。
- (7) 拙著『ごく短い小説の研究 近現代日本掌編文学論』(大阪大学出版会、二〇二五年)第3部第2章「織田作之助『実感』—掌編文学の生成」を参照されたい。

- (8) 『文藝』一九四二年一月
- (9) 杉山平一は「織田作之助について」(『大阪文学』一九四三年七月)で「動物集」は彼の秀作とし、「織田作之助君を偲ぶ」(『文学雑誌』一九四七年五月)でも「彼の空想ものの頂点」と述べている。
- (10) 宮川康「織田作之助『馬地獄』の教材性—現代文分野における「大阪の文学」の教材として—」(『研究紀要』一九九五年三月)、拙稿「織田作之助『馬地獄』の方法—北尾録之助『近代大阪』を手がかりに」(『国語国文』二〇一一年一月)。
- (11) (10)の宮川論参照。
- (12) (10)の拙稿参照。
- (13) 中途で、Dでは「女は子供の守に位置にかまけた」と書かれていた部分が、発表本文では「女は子供が可愛くなつた」とされた改稿にも、女の愛情を強調する意図が明らかである。
- (14) この点は、早く瀧田貞治『「漂流」と西鶴の作品—西鶴雑話—』(『台湾文藝』一九四四年七月)に、「これは『織留』三ノ四「何にても智恵の振売」をそのまま巧に作中に応用したのである」と言及がある。なお、吉田精一「織田作之助と西鶴」(『現代文学と古典』至文堂、一九六一年、二五六頁)も、西鶴作品と『動物集』との関係を指摘している。

〈付記〉本研究はJSPS科研費22K00293の助成を受けたものです。

(大阪大学大学院教授)